

第2回 総合計画審議会 議事要旨

■日 時 令和2年11月16日（月）9時30分～12時00分

■場 所 消防局庁舎4階災害対策本部室

■出席者 【委員】

高見沢実委員長

岡本琳南委員、小川喜久雄委員、小原信治委員、門井秀孝委員、菊池匡文委員、菊地萌歌委員、北村明美委員、小泉純一委員、櫻井聡委員、島由紀子委員、鈴木立也委員、千葉理恵子委員、鳥澤一晃委員、馬場亮委員、牧瀬稔委員、宮田丈乃委員、村田範之委員、安井哲也委員、山本愛子委員、好村明理彩委員、若松滋俊委員

（以上22名、50音順）

（欠席：相馬希咲委員、高橋恭子委員）

【事務局】

平澤経営企画部長、宮川都市戦略課長、太田主査、山中

■傍聴者 市議会議員7名 その他1名

■議事内容

- 1 第1回総合計画審議で提供依頼のあった資料について
- 2 分野別未来像について（観光・文化／海洋／産業振興／環境）
- 3 その他

9時30分 開 会

1 第1回総合計画審議で提供依頼のあった資料について

(事務局)

- ・前回会議で、小川委員より横須賀市の所得に関する資料の提供について、ご提案があったので、1人当たり平均所得の県内比較を参考資料にお配りしている。ご覧の通り、県内19市の中で、本市は15番目、下から5番目に位置している状況。こちらの資料についても、未来像の検討の際の参考にしていただきたい。

(小川委員)

- ・資料の提供をお願いしたのは、小学校の学校評議員をやっている中で、給食費が払えない子どもの数が多いという現実がある。だから、親の生活基盤をとらえて、子どもたちの状況を考えていくということをお願いした。

2 分野別未来像について（観光・文化／海洋／産業振興／環境）

（1）観光・文化

（小原委員）

- ・質問、確認という意味合いだが、横須賀市の地域資源の中に海軍や米軍基地は含まれるのか。含まれるとすると、まちづくりの分野にある「可能な限りの米軍基地の返還」と矛盾していることにならないか。2030年になっても軍事関係のものを観光資源にし続けるのか続けないのかということ、確認し明記するのが未来志向なのではないか。

横須賀は、自然の豊かさが売りと言っても、やはり基地の街というイメージが一番大きく、時にそれが観光や移住の促進においてマイナスに作用することもあるのではないかと。この点を話し合った上で、地域資源を定義するべきではないかと思う。

（事務局）

- ・横須賀市では、東京湾要塞など、今残ってる遺産を活用することで、ルートミュージアム構想という形で、観光ルートを新しく作ったり、米軍で言えば、ネイビーバーガーという食の取り組みもある。これについても、基地を絡めた観光ということでは、地域資源の中に含まれる。それらと、基地の返還という話とは切り離して考えている。

（櫻井委員）

- ・観光・文化はブランディングを考えていかないと、今まで通り、風光明媚であるとか、特産品といったことにゆだねられてしまう。ただ、都市のブランドというのは、今まででいう物、事、箱、特産品やイベント、地域資源というのではなく、オンリーワン志向でないといけない。先ほどの基地の文化も地域資源ではあるが、大事なものはブランド力。第1に買いたい、行ってみたい、住みたいといった魅力評価。第2に生活に便利、歴史文化の伝統資産評価。第3に最も重要な要素として、それらをまとめて街が体現するオンリーワンの価値、こういった評価、総合力をアピールしていくことを考えた上で観光・文化を10年後に向けて取り組んでいくという姿勢が必要だと思う。

（高見沢委員長）

- ・そのような観点は、どこにどのように込められているか、あるいは、込められていないのか。また、すでにそういうふうになっているのか、今後、ますますそういうふうにしたいたいということなのか、事務局はどうか。

（事務局）

- ・現在、市でもプロジェクトチームを作り、観光・文化についても議論している。その中では、様々なものをパッケージ化し、ブランドというか一つのストーリーといった形で見せていく必要があるという議論は出ている。

(牧瀬委員)

- ・ブランドの語源は、中世ヨーロッパの時代、生活するために各家庭で飼っている牛を区別するための焼印だと言われている。つまり、違いを作ること、差別化をはかること。だから、ブランド考える場合は、この差別化がすごい重要であり、横浜市と差別化するのか、三浦市と差別化するのかで、全然変わってくる。それができなければまずいと思う。ただ、ここでは、総合計画だから、ばくっと考えて、具体的な個別計画で差別化をしていくのがベストだと思う。

(島委員)

- ・観光・文化について視点が二通りあると思う。一つは、横須賀市民の方がどう観光・文化に触れ合うか。もう一つは、横須賀の観光・文化の魅力を外部に発信して、いかに外来者の方をお迎えするか。そこを両建するよう計画、構想を記載するべき。
- ・特に、やはり住民の方にとってはそれを自分で体験する、学習するだけでなく、それを地元の魅力だと認識してもらい、いかに外部の観光客に、皆さんでPRするか。そういった視点を皆さんで持っていけるような、そういうコンセプトにしていったらどうかと考える。
- ・横須賀市とは色々なコラボレーションをしていて、大きな観光施策をやっている。そういったものの中に、地元の商店の方、事業者の方、また、住民の方まで一緒になって、お迎えする側のキャンペーンというのができればいいと考えている。もちろん市民の方が、京急のキャンペーンで、楽しんでいただくのはもちろんだが、外部からお客さんを呼び込むというところにも、賛成というか、受け入れる体制というのを市民の方ともやっていけたらいいのではないかと考える。

(高見沢委員長)

- ・昨日、三浦半島を一周して、観光客として見ると横須賀や三浦、葉山の色々な案内があって、その中で、これが横須賀という仕分けがあったほうが方が良いのか。

(島委員)

- ・今は、そういう形で企画切符を作っているが、京浜急行としては、回遊性を高めて、葉山から横須賀へ、横須賀から三浦ということで、日帰りではなく、1日、2日ともっと滞在してもらうような企画ができるのがいいと考えている。

(菊池匡文委員)

- ・地域資源を生かすということは非常に重要なことで、長年の課題でもあると思う。地域資源の点をいかにして線で結び、面として、あらわしていくかということが課題で、正直、今までそれが上手くできていなかったと思う。それはなぜかということ、地域資源という一つの言葉でざっくりと把握すると、横須賀には地域資源がたくさんあり、それぞれの方々の想いもある。これから先、もっとその地域資源を噛み砕いて、横須賀には、どういうものがあるのかをきちんと明文化し

うふうに見て、どう外側に発信していくかということが重要だと思う。

(高見沢委員長)

- ・地域資源というのは、これを見れば横須賀の地域資源が分かるという、基礎作業や研究というのはあるのか。

(事務局)

- ・観光基本計画を作っているの中で、地域資源について記載されていると思う。基本構想の記載も、簡単に地域資源と示すのではなく、分かりやすく、具体的な示し方も考えていきたい。

(牧瀬委員)

- ・これは総合計画なので、アバウトでいいと思う。問題は、その下にある個別計画。横須賀市観光立市推進基本計画、アクションプラン、横須賀市文化振興計画では具体的に書く必要がある。そこで書かれていないというのが現状で、そこに問題点があると思っている。地域資源の活用はアバウトではいけない。ブランドというのは大項目でなく小項目で勝負する。例えば、自然ではなく高尾山とか。それが個別計画で書かれていないのが問題。この総合計画ではアバウトにやっっていくのでいいと思う。
- ・あと、目標がないといけないと思う。例えば、島委員がおっしゃった住民の方を対象と外の方を対象というのが。私の関わっている某市は、住民に対しては、マイクロツーリズムでやっている。シビックプライド、市民の愛着を高めていこうと。外の方に対しては、外貨の獲得と明確にしている。これは、総合計画に書いていて、かつ個別計画に落とし込んでやっている。なので、この総合計画ができた後に、各個別計画を改定して、プラスしていくと思うが、そこで具体的に書かないと、結果的には、アバウトなままで終わってしまうのかなと思う。

(鳥澤委員)

- ・地域資源が曖昧な形で議論が進んでいるので、皆さんそれぞれイメージがあるかと思うが、何がここで議論されるべきなのかは、少し具体的にしておいたほうがいいと思う。

(山本委員)

- ・お話に出たことを、自分の生活に置き換えて考えた。特に、市民の方に向けてなのか、外部の方に向けてなのかということは、まさに、アーティスト村でも話がある。アーティスト村は、細い道の奥にある場所で、あまり外部の人が来るというわけではないが、認知はしていただきたい。でも、情報発信の仕方、人の呼び方は、まずは近隣の方に向けて馴染んでもらうことから始めようということで、情報発信も、Webでイベントの告知をしても、あまり響かないが、地域の掲示板にしたら、地域の人がいっぱい来てくれるようになったりして、誰に向けて情報を発信するのかということで、やり方が変わってくると考えている。

(事務局)

- ・地域資源が少し曖昧というお話を委員からいただいたので、頭の部分の文章に、例えば、自然、歴史、文化、食など、列挙させていただいたきたいと思う。また、市民、外部のことについては、まずは、市民が愛着を持てるような仕掛けを作っていく。そうしたことで外にも伝播していくということが書いてあるので、この表現でいかせていただきたいと思う。ブランディングにつきましては、どこかの部分に、ブランディングという言葉を入れるようにしていければと考える。
- ・具体的なお提案につきましては、右側のページにあるよう、実施計画の方に落とし込んでいたり、あるいは牧瀬委員がおっしゃっていたように各分野別計画に反映できるよう、各部と調整を図っていきたいと考えている。

(門井委員)

- ・観光・文化に限った話ではないが、例えば「市民が絶えずワクワク・ドキドキできる、自然と外出したくなる、誇りや愛着が持てるような仕掛けを作っていきます。」という記載があるが、現状がどのような形になっているか、ここからだ、あまり見えてこないというのがあり、もしかしたら達成できてるかもわからない。私は外歩くのが好きで、わくわくもする。バックキャストでやられるということなので、この目指すべき姿があるのはいいが、現状どういう形なのかが分かる資料をいただくと非常に助かる。

(事務局)

- ・現状が悪いということではなくて、より一層という考えで、足りない部分も当然あるので、それについてしっかりやっていくということである。

(門井委員)

- ・現状がどの程度で、より一層がどのくらいかということで、認識のずれが出てきてしまう。それを、ある程度統一した見解を持ってから議論した方がいいんじゃないかと考える。もし何か、そういうものがあれば、ご用意いただければと思う。

(事務局)

- ・近いものがあるかどうか、すぐには分からないが探してみる。

【意見記入シート】から

- ・住民と外部という視点にとっても共感した。実際に住民、地元の楽しみ方を外部へ発信することも出来るのではないかと思う。
- ・横須賀出身の有名人や研究者などをITの世界を使いPRするなど、ITを観光・文化に幅広く活用する。
- ・アート音楽ではトータルなコンセプトを背景としたイメージを打ち出すことが必要。
- ・すべての地域ではなく、重点的に取り組む地域を決めた方がよい。
- ・スカジャンは文化。
- ・どんなイベントがあるのか、幅広い広報を。
- ・公共機関などと連携して行くと、皆もっとわくわくできると考える。
- ・全体的に漠とした口当たりの良い言葉での記述になってしまう感が拭えない。共有できるビジョンは明確化したい。
- ・自然と文化、スポーツの融合は望ましいと思うが、ロードバイクに代表されるように「自然観光」は収益化しにくい。地域住民にとってはごみ問題など負の側面もある。半島内で野外イベントを企画したこともあるが、必ず問題となるのがごみとトイレと駐車場の問題。この課題の解決なくして2030年に「自然観光」は成立しているのか。例えば、市全体を巨大なテーマパークと捉え直し、ごみ・トイレ・駐車場のインフラを2030年までに事業化するなどできないのか。
- ・PRの仕方もターゲット別に考えなければならない。

10代 20代—instagram・twitter等のSNS→自ら検索せずとも情報が見られるツール(若者(10代 20代)の興味度合いを計るにはinstagramの「#」検索でみられる。「#」数が多いと来ようとしてくれる人も増える。)

30代 40代—Facebook

誰が何を見ているのか、何を参考にしているのか、目玉を作ってもそれを検索してもらおうとしたらムダになると考えた方がよい(今現在調べてくれる人は少ない)。

(2) 海洋

(村田委員)

- ・書いてあることはすべて当たっている。横須賀の海は、特別な存在ということで、県レベルなら、これだけの多様性を持っている所はあるだろうが、市のレベルではまずないだろうと思う。この多様性が特徴であって、最大の横須賀の強みなんだろうと思う。
- ・東海岸と西海岸で違い、ウインドサーフィン。特に海岸は夏の利用に限られるが、冬の間も非常に良いので、四季を通じて観光を呼べないかと思う。
- ・当機構を含め、研究開発機関が横須賀には多くある。今、海ってどうなっているのか、これから将来どうなるのか、課題はどういうふうに解決するのが海洋研究の大事なところ。例えば、ここにあるマイクロプラスチックは、今、どんどん海に流れている。水は低きに流れるものなので、陸上のごみは、最後には海に流れていく。2050年、30年後には、魚の重量とマイクロプラスチックの重量が、海の中でほぼ同じぐらいになってしまう。解決は難しいが、当機構でも取り組みを始めている。こういうことに、横須賀市民の方に関心を持ってもらう、ますます海に興味を持ってもらうことに、まずは力を注げれば良いと思う。これが10年20年経っていくと、海への関心がさらに高まり、海への意識が非常に高い横須賀というのが定着してくると思う。

(高見沢委員長)

- ・研究課題で何か、横須賀ならではとか、今後取り組みたいこととかはあるか。最近、災害の対応も非常に重要じゃないかと思うが、どのような取り組みをされているか、簡単でいいので。

(村田委員)

- ・研究内容は、多岐にわたっているが、例えば、地震関係。それから温暖化。海洋の酸性化というような話も出ている。当機構では、北極の方まで視野を広げて、地球全体の気温がどうなっていくか。例えば、もし地球に海がなければ、気温は温暖化で200度以上になっていると言われている。海はこんなにありがたいんだよねというのが。かなり海というのは知られてなく、とっつきにくいところがあるが、そのような研究を進めている。

(高見沢委員長)

- ・日本全体で見たときに横須賀にこの研究所があるというのは、ブランドなのか。他にもたくさんあって、その一つに過ぎないのか、どのくらいダントツなのか。

(村田委員)

- ・自分の所を言うのは、非常に心苦しいが、世界の五大研究所の一つと言われているので、かなり突出していると思う。ただし、水産関係をやってなく、水産関係の研究所は別にあるので、それ以外の所については強い。

(高見沢委員長)

- ・私の目から見ると、これぞブランドって感じがして、海があって、かつ研究しているというのは、本当に誇るべき財産だと思う。

(小原委員)

- ・質問だが、漁師さんに話を聞くと、海水面が上昇していて、生態系が変化して、今まで採れるものが採れなくなっているとか、海の栄養が、山が荒れているから細くなったりするとか、砂浜が小さくなってきている。2030年にこういう未来になって欲しいということだが、それに関し、海水温の上昇はこうしたいとか、砂浜が狭くなっているのはこうしたいとか、荒れている陸を復興させて、海の栄養を取り戻すみたいな、そういう具体的な目標みたいなものはここに書くべきなのか、書かないべきなのか、その辺りを事務局に伺いたい。

(事務局)

- ・課題としてあると思っている。先ほどの通り、下位の計画で分野別計画もあるので、そうしたところで具体的な部分を記載していく。

(小原委員)

- ・全体的に漠然とした感じで、具体的なことが何も書かれていないので、市民や外部の方が読んで「刺さるのか」というのが全体的な印象。全世代、全職種、すべての人に向けて、多様性のある方々に向けて書かれているので、結果として「みんなが幸せで笑っている未来」というような漠然としたことになっている気がするのだがどうか。

(事務局)

- ・夢のある未来をとということで、確かにそういう課題もあるとは承知していて、その辺は、バランスだと思う。例えば、前の時代背景の所で課題を書いて、そういう課題を持った上で、将来こうあるべきということを考えていきたいと思う。

(岡本委員)

- ・私も、すごく漠然とした全体的な記述が多いなと感じている。それは、致し方ないことで、やはり市民全体に向けて、対象が大きなものになっていくということは、ベン図で書いた時に重なる部分を非常に大きくしないと、対象が絞られていってしまうというのはあると思う。
- ・その上で、それでもある程度具体的に描けるものではないと、この先、より一層細かいことを分科会でやっていくのかと思うが、それを踏まえたときに、いろんな立場の方の意見を吸収していく必要があると思っている。私も、公募委員として、この場に参加しているわけだが、先ほど、地域資源が具体的に何であるかという話で、列挙をするというふうにお答えいただいたが、それだけでは足りないと思う。やはり定義の部分、地域資源とは具体的にこういうものがありますというだけではなく、横須賀市としては地域資源とはこういう概念でこういう定義に

とらえていきますというのを、いろんな立場の方からお話を聞いた上で、考えていくという過程がすごく重要になるのではないかと思う。

- ・今回、記述するにあたり、例えば海洋では、どれだけの人が海洋の問題に対して現状認識をしっかりと共有してるのかという部分も、いろんな世代の方や、いろんな仕事に関わっている方、漁業であったり、観光業であったり、それからスポーツをやっている方であったり、いろんな方を、一同に集めてその場で話を聞く、そこから、多様な考えがあるというのを共有して、それで一つの目標に向かっていくという過程がすごく重要になるんじゃないかと思う。

(島委員)

- ・横須賀市ならではの小学生向けの海洋教育のようなプログラムは、現在どのようなものを行っているのか、お伺いしたい。というのも、意見として、これだけ海に近いということで、同じ神奈川県の中でも、もっと海に触れるような、教育のプログラムがあってもいいんじゃないかと思う。例えば、海洋研究開発機構さんのように、すばらしい研究機関があるので、そういう所の見学や、プラスチックの問題も、単なる机上での問題意識というよりは、海岸に出てごみを拾ったり、現状を見てもらうとか、そういった、もっと本当に海そのものを、資源、財産とした教育を子どもたちにやっていくことが将来に繋がるのではないかと思う。
- ・私自身、横須賀で夏休みは海岸で遊んだという思い出があるが、確かに、砂浜が少なくなっているというのも聞いていて、実際、自分の子どもを連れて海岸に行ったということはあまりなく、京急がやっている三浦海岸も、一昔前に比べると随分利用者が減ってしまっている。そういう時代の変化をいかに、横須賀市として、海について、もっと施策を主体的に打っていったらいいんじゃないかと思う。

(事務局)

- ・海洋教育というと、今年度から横須賀海洋クラブを小学生向けに立ち上げ、色々な海洋に関する仕事やマイクロプラスチック問題とかも取り上げている。あとは市民全体に向けても、これからマイクロプラスチック、海洋のごみに関する対策については、進めていきたいと思っている。

(村田委員)

- ・海洋研究開発機構のホームページを見ていただくと、お子さん関係のものもかなり充実しているので、見ていただくと「おお」と思われると思う。

(高見沢委員長)

- ・「研究開発機関とも連携した担い手育成のための海洋教育」と書いてあるが、実際、連携してやっているわけではないのか。

(村田委員)

- ・今までも、子どもたちにはがきに絵を書いてもらったり、見学は横須賀市内からたくさん受け付けているが、国の機関なので、横須賀市の小学生だけに海洋教育

をしているというわけではない。ただ、地元としてはとても大事にしており、お声がけいただければ、出前授業などいろいろとやっている。

(小川委員)

- ・昨日も、ヴェルニー公園の所で、海岸の清掃をやってきた。北の風が吹くと、あそこのごみは多い。昨日は、珍しく綺麗だったが、自分たちで船を持って行って、海洋のごみを拾った。もう、10年以上こういう活動をしている。色々な方々にも参加を呼びかけて、最近、米軍基地の若い兵隊さんと一緒に清掃したりして、そういう活動を通して、市民の方にもそういう姿を見てもらい、海を綺麗にしていこうという意識を高めていきたい。このきっかけは、軍港めぐりに来た人が「汚い」と言っていて、これじゃいけないと思い、仲間を集めて、こういう活動をしている。だから、いろんな方が、海岸の清掃を進めているが、もっと、日常的に、海岸にごみがあったら、自分たちで拾うとか、そういう意識を持った人たちをどう育てていくかということが、海洋の問題の基本的な部分であると思う。
- ・それから、個人的には、西と東を結ぶ、イベントみたいなことができる、もっと海の魅力みたいなものが、市民の中に広がっていくんじゃないかと思う。その辺の所を、こういう中に具体的な目標としていけたらいいかと思う。
- ・研究所について、私も2回見学した。本当にすばらしい施設で、子どもたちにも、横須賀の学校教育の中でちゃんと位置付けて、見てもらったほうがいいと思う。見学者がいっぱいで、なかなか見学の日程が取れないということもあるが、何とか市民にアピールするような財産として考えていただければと思う。

(鈴木委員)

- ・地域資源や海洋という話になると、どうしても横須賀は軍の話が出てくる。私は、それはもう過去のこと、昔こういうことがあったという話を若者にもするべきだと思う。例えば、JR横須賀駅では、大きい戦車や大砲の台でも何でも、今のJRの電車に乗せて横須賀に持ってきたため、階段がないという名残がある。歴史の話では、ペリーが浦賀に来た時は、アメリカ人は体が大きいので、お相撲さんに来て対応してもらったという話もある。私は、大津に住んでいるが、近くに走水の低砲台跡がある。これは東京湾の入口に大砲があったということ。軍のことは、横須賀の話しにくいことではあるが、それを、皆さんが過去のこととして、話をしたらいいんじゃないかと思う。

(櫻井委員)

- ・横須賀の子どもたちの海洋教育で、西と東とでは異なっていて、西地区の方では、例えば、フグの稚魚を放流するといった活動をしている。東地区の方は、そのような形で海に触れ合う場所があまりないので、もう少し西地区の方に来てもらうといいかもしれない。また、学校の授業で、海洋ごみについては、先生が話をし

ていると思う。子どもたちも、マイクロプラスチックの話をしている。

(牧瀬委員)

- ・海洋こそが横須賀のブランドになると思う。海洋でやっている自治体は少なく、内閣府は海洋基本計画を持っているが、基本的にほとんどやってない、やっているのは静岡市と、あともう一つが横浜市。横浜市は、海洋都市横浜をキャッチフレーズとして力を入れている。また、ブランドに戻るが、横浜市と差別化するのか、あるいは、横浜市のおこぼれをもらうのかという議論。それを明確にしていけないとまずいと思う。ほとんどの行政でやっていないので、すごい価値はあると思うが、たまたま横浜でやっているから、そことの違いをどうするのか考える必要がある。
- ・「稼ぐ。そして守る」とあるが、稼ぐと人がいっぱい来るので、オーバーツーリズム状態になって、守れなくなる可能性がある。今、鎌倉はそのような状態。どんどん人が来て観光公害になってしまうので、外貨獲得と地域への外部不経済がトレードオフ関係にある。それをどうするのか考えていけないといけな。火がついてバンバン来て、地域資源という海洋がほとんど壊れてしまったでは話にならないので、そこをしっかりと下位計画で担保していく必要がある。ところが横須賀市の下位計画って港湾なので、若干趣旨が違っているので、そこは、よくよく考えていけないといけなと思う。
- ・先ほどから、議論になっているのは、いわゆる総合計画だと具体的に見えてこないという議論で、確かに総合計画とは、そういうもので仕方がないが、市民の方を考えると、確かにそれは不満があると思う。なので、例えば、イメージ写真イラストとあるが、これはとってしまっ、ここにイメージを想起させることを具体的に書いてもいいのかなと、具体的にこういうことをするか、下位の計画ではこういうことが書いてあるとか。そうしないと、市民の方は理解できないし、抽象的になってしまうので、空いているスペースに、下位の計画で、実際にこういうことをやっているということを書かないと、魅力がなくなってしまうのではないかと思った。

(事務局)

- ・右側に、より具体的なことを書いていくが、まだそこを示していないので、具体策がないのかという話にはなっている。これについては、これまでいただいた意見も踏まえて、右側に具体的なことを書いていく。左側の部分については、都市像というか未来像なので、ぼやっとしているというイメージはある。そうした未来に向かってこうしていくということを書いている。
- ・横浜が海洋都市宣言をしているのは承知している。横須賀と横浜とで違いは当然ある。横須賀の海は港だけでなく、東側の産業の海と、西側の直接触れ合えて楽しめる二面性を持っている。横須賀の海洋については、現状組織や計画がある

わけではないが、そうした打ち出し方をここに書いていければと思う。

(高見沢委員長)

- ・海が全く違う。横浜は人口的なものは作っているが自然の海岸はゼロではないか。
- ・稼ぐというのが出てきて、そして守る。この稼ぐの意味合いはどのようなものか。

(事務局)

- ・稼ぐというのは、港湾の部分の意味合いが強い。客船など港を活用した稼ぐというところ。また、漁業も含めて、稼ぐということが記載されている。それと守るという視点。漁業でも、磯焼けや温暖化という話もあるが、両面性あり、トレードオフということはあるが、稼ぐ所と守る所の違いはあると思う。

(高見沢委員長)

- ・観光公害になるほど稼ぐのか、そこまで稼げそうもないから稼ぐと書いてあるのか。

(事務局)

- ・稼げないとは思っていない。稼げるポテンシャルがあると思っているので、どのようにそこを生かしていくかということ。

(菊池匡文委員)

- ・小原委員と岡本委員が言われたことは、私もそのように思っていて、総合計画だから、ざっくりということで片付けるのか、このテーマに対して、どういう方向性を持っていくのかということが、これを読んで、分かるのかどうなのかという気がした。やはり、もう少しその方向性が示せるようなことが書いていないと、具体的にいきなりいくということが、ちょっと危険な部分を感じる。例えば、島委員から海洋教育ということがあり、そのぐらいいはあってもいいのかなど、海洋について、どういうことをやっていくのか、教育を強化していくとか、そういった部分ぐらいいまではあってもいい。ただ、教育だけではないので、それは一つの例として、他にもあると思う。小川委員がおっしゃったように、海が汚いと、これを綺麗にしていくんだという方向性を見せるとか、そのために何をしていくかということが、やはり、タイトルでなければいけないと思う。言葉尻を捕ってはいけないが、2番目の矢印の「東海岸と西海岸が二つの顔がある」ということが、タイトルとしてあり得るのかどうかということ。もう少し、方向性を示すようなことがないと、我々は議論をしているから、プロセスを知っているが、市民の方が、これをいきなり見て、方向性がどうなのかということがわからないと、小原委員がおっしゃったように刺さるのかということにも繋がってくると思う。
- ・もう一つ、観光・文化で、私が申し上げた文化での才能という話は、才能を生かすために事業をやっているかどうかということを行ったわけではなく、文化を伸ばすためには地域で生きてる人たちの才能を伸ばすことが、文化を醸成することじゃないかということなので、文化のために才能を伸ばすということも、一つの

方向性なのではないかということを示し上げた。そのくらいのいくつかの方向性というものが、この段階で分かっていないと、いくら総合計画といっても、市民の方々が、なるほどと思うようにはならないのかと。これは、まだ議論の余地があるということで示し上げた。

(小原委員)

- ・今のお話に付随して、提案というかアイデアで、やはり全市民、全世代に向けているから、何か漠然としてしまうというのは絶対的にあると思う。同じことを言うにしても、例えば、2030年に生まれてくる子どもに向けて書くとか、2030年に社会の中心になる今の10代に向けて、こういうものを2030年までに作っていきますという約束を書くとか、ターゲットをはっきりさせることで、もう少し、具体的なことが、左ページにも書けるのかと思うが、総合計画は、全世代、全職種の人に向けなければいけないものなのか。

(小泉委員)

- ・それぞれごもつともで、様々な要素から考えていかないと、観光にしても、海洋にしても進んでいくべき道が見つからないと思う。先ほどから、2030年の姿に向けての総合計画ということで、総合計画は羅針盤なので、羅針盤として2030年まで、市がどの方向に向かっていくのか、市民の皆様とともにどこに向かっていくのかという中で、割とざっくりとして大きなものになってしまうというのは、県もそうで、基本的な姿だと思う。ただその分、下位計画の方にしっかりとそのエッセンス、趣旨を盛り込んだ形で、具体的な取り組みを盛り込んでいく形になっていくのかなと思う。あくまでも、この総合計画の中では具体性もあっても構わないが、羅針盤として、こういう方向性に2030年の市民の皆様、その時におられる市民の皆様に、こういう横須賀市をプレゼントするんだという意味合いで、この総合計画をまとめていくと思う。

(鳥澤委員)

- ・事務局の方に教えていただきたいが、左側が少し曖昧という位置付けも理解したが、下位計画を具体的に書く時に、ここで議論されている皆さんの思いとか、意見とか、どの程度反映されるのかということが、現状ではよく分からない。傍聴されている議員の方々が、ここで議論されていることを踏まえて、下位計画を具体的に書き起こすということであれば、ある程度認識も共有できるような気はするが、左側の部分が完成した後、我々の議論とは切り離されて、この文章だけで、下位計画を作るということであると、議論されたことが十分反映されるのかどうかという点で不安に思った。その辺について、今後の進め方を教えていただければと思う。

(事務局)

- ・具体的なものについては、この計画の右側の部分に書いていきたいと考えている。

なので、全くいただいた意見が反映されないということではなくて、大きな方向性を左側に書いて、より具体的には右側で書いていくというようなイメージ。これから、具体的にここをお示しすれば、このように反映されているんだよと見えてくるかと思う。

(事務局)

- ・先ほど、岡本委員がおっしゃった前提条件をすべて書くというのは、基本構想・基本計画には、少しそぐわないというふうに思う。ここにすべて、例えば地域資源をこういう理由で選んだということを縷々書くことは、基本構想・基本計画の性格上違うと思う。ただ菊池委員がおっしゃったように、ある程度市民が、横須賀市がどういう考えで、こういう基本構想・基本計画を作ったのかということは、やはり書いていく必要があると思う。左側のページが、基本構想・基本計画のうちの基本構想の部分で、ここは2030年のあるべき姿、そのあるべき姿を実現するために、どういう政策を打っていくかっていうのを右側に書いていくというのが、課長が申し上げたこと。この基本計画の下に、また新たに、別冊で実施計画というものも作る。これは2030年ではなくて、4年間、2030年までの8年を二期に分けた実施計画を作るので、今、皆様にご議論いただきたいのは、2030年のあるべき姿として、どういう横須賀であつたらいいかということについてご議論をいただいた上で、行政として、それを実現するために、どういう政策を打っていくかということ、右側に記載し、この部分については改めて、この審議会にお示しをしたいというふうに考えている。

【意見記入シート】から

- ・横須賀の海はきれいなのか。汚いのか。きれいな海を守って更にきれいにしていくのか。汚い海を市民全体できれいにしていくのか。その中で、海洋政策を作り上げていくことが、より市民に示し易いストーリー作りができるのではないか。自然の恵み、海洋資源が見えてこないで活かしきれてない。
- ・「ウインドサーフィンといえば横須賀」ということ自体を強調し、世界的な選手が出てくるようエリート養成機関を設置するなどの取組みも必要。ワールドカップを他地域に奪われないようにしたい。
- ・海と山のつながりの中で海を考えていく。文化的なものがそれぞれ密接につながっているので、分野ごとに話すというよりは、分野をどうつなげていくかに視点をあてて話すなどできたら良い。

(3) 産業振興

(櫻井委員)

- ・本業でネット通販をやっている。横須賀の立地はECに適していて、日本のほぼ中心部にあり、青森から九州手前までは即日、翌日に配送ができる。EC自体は急上昇しているの、そこに乗っかるというのが産業振興に効果的であると思う。
- ・横須賀市の就職先の業種は小売業、サービス業が多く、つまり、お店の店員さんなどへの就職率が一番高い。所得の順位が低いのも、おそらく、労働生産性の問題が非常に大きいのではないかと。例えば、店頭で1人立つと、1時間当たりでさばけるのが10人、1人1,000円の粗利を持ってるとして粗利で1万円。ECビジネスでは、1時間でさばけるのが100件。労働生産性が10倍違う。横須賀市で就職率の高い小売業やサービス業でも、ECを活用したものを誘致していく。
- ・ネット通販の講師の仕事もしているが、ECで一番ネックになるのが物流コスト。特に、昨年あたりから、物流クライシスといって、物流がパンクしてしまうので物流コストをどんどん上げていこうという動きがある。実際、3年前で一個当たりの平均物流コストが380円くらいだったのが、今500円くらいまで来て、ECも成り立たないという状況があり、少しでも安い物流コストが求められている。ここで、例えば横須賀市が物流の補助助成をすとか、物流のプラットフォームを立てれば、ECビジネスが相当呼べる、また、これは通販だけではなく、ECの様々なビジネスチャンスが横須賀に生まれるのではないかと。と思う。

(高見沢委員長)

- ・都市整備に関わるかもしれないが、横須賀市としてはどのような認識か。

(事務局)

- ・交通網では半島ということもあるので、高速道路はあるが、物流という観点でいえば、県央などと比べると、若干ポテンシャルは落ちるのかなという認識。

(櫻井委員)

- ・物流の補助をするというのは、インフラというよりか、例えば、少額でも1個当たり50円くらい補助を出すといったことができれば、本当に日本中から集まると思う。ネット通販の講師をしていても、やはり物流をどう乗り切るか、粗利をどう確保するかというのが最大の議論になる。市の方で、ある程度物流コストを補助などでできれば、基盤を集中させることができると思う。
- ・インフラは確かに難しい所はあるが、例えば、物流のプラットフォームを1ヶ所作って、そこから配達事業者が配達できるようになれば、インフラもある程度はできると思う。

(鳥澤委員)

- ・魅力的な話に感じたが、他の市町村で同じような取り組みはあるのか。あと、横須賀ならではのことは何かあるのかを教えてください。

(櫻井委員)

- ・物流の中心、例えばECビジネスのプラットフォームを呼んで、施設を提供するというのをやっているところはない。楽天市場やアマゾンが、大型倉庫を用意して、そこから物流まで全部やるというところはあるが、ここは、物流コストも手数料も上がるので、店舗側は厳しい。もし、地域でこれができれば強みになると思う。
- ・確かに、相模原や町田といった所もあるが、土地代が高いので、店舗コストが高くなり、運営コストは高い。横須賀は、土地代が安いというのが魅力。また、先ほど申した通り、日本の中心部に近い。横須賀から発送すると、翌日に青森、島根とかまでに到着することが可能であるということが利点だと思う。

(菊池匡文委員)

- ・ECビジネスが発展する中で、横須賀市にとって物流というのは、絶対に必要なところ。情報とお金は、テレポートできるが、物と人は、テレポートできないので、ECビジネスが活性化すればするほど、絶対的に必要になると思う。
- ・ただ、今の横須賀の産業構造を見ると、以前は、輸送用機械の大企業がグローバルサプライチェーンの中で回っていたが、そういう形から激変して、ローカルサプライチェーンが複数できてるような中で、みんなで寄り添いながらビジネスをしているというのが現実。そこで、製造業が中心になると思うが、その中で産業構造の変化に合わせて色々なサービス業が増えてきてるのが今の横須賀の産業。そこをどういうふうにシフトしていくかということが、大きく横須賀の産業構造を考える上で重要になる。本当に、シフトするのであれば、施設も考えて、物流も考えて、道路事情も考えて、いわゆる社会資本整備までいくと思う。これは、後の議論とするとして、この産業振興というテーマに戻ると、要は産業構造自体が変わっていて、地域の小さなローカルサプライチェーンがたくさん生まれて、その中でビジネスをしていて、中での濃密な関係で成り立ってるのが半島経済だと思う。
- ・どう産業振興していくかを考える中で、雇用の問題がある。若い子たちが横須賀に働く場所がないというイメージを持たれてるというのは、非常にこれから大きな課題になるんじゃないかと思う。横須賀で働きたいというふうに思ってもらわないと、いい人材がどんどん流出していくので、今の横須賀の産業というものを、どうブランディングしていくかということが非常に大事だと思う。横須賀には、実際、高い技術力を持っている企業も、中小企業もたくさんあるので、そういったところをどうやってブランディングして、若い人たちに魅力を感じさせるか、横須賀を、働きやすい、働きたい街にどういうふうにしていくかということが大きなテーマだと思う。
- ・ここに「その種となる新たな起業家の挑戦」と書いてあるが、ここは、ちょっと

違うと思うのは、起業家は種じゃなく、どちらかというとそのビジネスの種を生かして、ビジネスにしていくということなので、いかに横須賀のこの土地の中に、ビジネスとなる芽があるのかどうか、ここを探っていく必要があると思う。そうでないと起業家も出てこないし、正直、横須賀の起業家は、どうしてもマーケットの関係から横浜、東京に出て行ってしまおう。横須賀で業を最初から成り立たせるというのは非常に難しい環境だと思うので、その辺を、これから先の10年後を考えたときに、横須賀を産業都市にするためには、横須賀の産業のブランディングというものをどういうふうに考えていくかということと、横須賀にどれだけのビジネスシーズがあるのかということ、どれだけ露出させていくか、これじゃないと、なかなか産業振興というのは難しい。

- ・あとデジタルトランスフォーメーション。いわゆる失われた20年の中で、失われたものは何かと言うと生産性。生産性を高くしなければいけないと言葉では楽だが、やることは非常に難しい。大企業は、デジタルトランスフォーメーションに取り組んでいるが、中小企業は、なかなかその一步を踏み出していない。どうやって格差を是正していくかということが、10年後の横須賀の産業を考える上では、重要なポイントだと思う。

(小原委員)

- ・菊池委員のお話で全く同意で、それと付随して、「横須賀は大小の産業の理想的な共存を目指します。」と書いてあるのも、理想としてはすごくいいと思うが、これが失敗して、個人商店や商店街の小売を潰してきたのがこの20年、30年だと思う。今後、どんどんローカルになっていく。ここにしかないものを、いかにたくさんに向けるかということになっていく中で、どこにでもあるものを増やしていくのは、あまり得策ではないと思う。それでも、大型商業施設みたいなものは必要なのか、個人商店とか中小企業を応援する輝ける街にするに当たっては、そこは思い切ってそういうものをやめますとはっきり書けないのか。

(事務局)

- ・現時点で、この方向をやめるとか、そういった方針を書くということは、この基本構想の中では想定していない。今後、お示しすることになる右側のページで、政策の方針や施策の目標とか、細くなるがその下の分野別の計画といったものを示す。その中で、個別具体のところは示すことになると思う。

(安井委員)

- ・産業振興、すごく大きな所をカバーしているので、書くのが難しいのかもしれないが、全体の印象として、ベンチャー支援や新しい産業を起こすということがはっきり読み取れる。菊池委員がおっしゃった通り、横須賀の伝統的な強みを生かしていくことが、一つの視点として重要だと思う。それと、新しい技術との融合が、今後、横須賀が発展できる一つの道ではないかと思う。

- ・連携のところに書いてあるが、連携の具体的な姿として、ここで、連携してビジネスを起こすと書いてあるが、そういったビジネスを起こす人材を育成する。例えば、Y R Pの研究機関に横須賀の学校の子どもたちがインターンで入るとかが、これからできるといいのではないかと思う。
- ・シーズ探しが重要ということは、おっしゃる通りだと思う。シーズの中で、注目すべきは、今の課題。コロナもそうだが、結局、何か問題が起きたときにそれをうまく活用して、チャンスととらえて、新しいものを残すと思うので、そういうこともシーズ探しの中で、重要な要素だと思う。

(高見沢委員長)

- ・Y R Pの立場で、実際の業務で特にこの辺はこう考えたいが市も一緒にやって欲しいとか、こういう限界があって困ってるだとか、お話いただければありがたい。

(安井委員)

- ・私たちは協会で、Y P Rの中で研究をしている方々と、外の方々との連携を進める立場で、実際に研究をやっている団体ではないので、具体的には言いづらいが、やはり研究人材不足というのは、Y R Pにある企業の方ほどなたも感じられていると思う。2030年になると、5 Gが6 Gの時代になる。そうすると、もっと通信速度は早くなるし、もっといろんなものがネットに繋がる時代になってくる。そういう中で、Y R Pでも、多方面の技術人材というのがこれからすごく重要だと思う。そういった点からも、先ほど申し上げたような研究研修機能や人材育成は重要だと。特に、情報系、デジタルトランスフォーメーションがどんどん進むので、色々なものがコンピューターの世界、サイバーの世界で、実現するようになってくるので、コンピューター系の技術は、今後10年、すごく重要だと思う。

(高見沢委員長)

- ・人材不足というのは、そういう働き手の市場は大きいけど、わざわざ横須賀まで来ない。住みたくないので来ないのか、それとは違う要因なのか。どういうことか。他の分野とも、関りそうな気がする。

(安井委員)

- ・Y R Pにある機関というのは、結局のところネットで色々なものと繋がるので、他の地域の人材をネット上で活用しながら、Y R Pの開発をすれば、そういったこともできるので、具体的にY R Pの場所でどうこうということでは実はない。ただ、この地域でそういったポテンシャルがあるのに生かさないというのは、もったいない話なので、横須賀にはY R Pがあるのだからそこをうまく使った方がいいのではないかと思う。

(千葉委員)

- ・20年くらい前、横須賀市は中核市になりO A化の推進を全国でも先駆けてやった市。これから、I Tはどんどん進んでいくので、上手く国の予算をとりながら

横須賀市はITを推進。年だからITができないではなく、多様性を持つてる方々のニーズに合ったサービスが提供できるよう、そんな市を目指して欲しい。

- ・私は、田浦に生まれ育った。谷戸の中で、階段が100段あったり、本当に不便な所だが、皆さん愛着があって、いまだにおじいちゃん、おばあちゃんたちが住んでいる。良い面も、不便な面もあり、そこを市としてどうとらえて、その不便さを、逆に利点としていくというのがすごく重要な課題だと思う。また、これだけ世の中が急速に変化していて、人の価値観もすごく変わっている。コミュニティと書いてあるが、私たちの年代のコミュニティの感覚と、若い世代の感覚というのがすごくジェネレーションギャップがあり、町内会一つにしても、班長できないしやりたくないから入りませんという時代になっているので、そういう部分も含めて、上手くITとかそういう情報の進化についていけないではなく、皆さんが均等についていけるような市を目指す。そういう部分も含めて、全体として考えていただきたいなという要望である。

(若松委員)

- ・金融業界で横須賀を考えた場合、私どもは地方銀行だが、数多支店があるメガバンクは、法人部門は全銀行がほぼ撤退状況。一部、まだ残してる金融機関もあるが、今後の方向性は撤退になっている。すなわち、金融機関としてみると、企業のマーケットとしては、もうシュリンクしているような目線で見られてしまっているというのが現実。地元の企業様と話をしていると、すでにM&Aで、横須賀で長いことご商売されてたところが、東京や横浜の資本に売却してしまうのが決定してるお話もいくつかある。先ほどから、お話が出ていて、まさにその通りだと思うのが、非常に技術をお持ちの企業でも、人材が全然集まらなないと、いくら募集をかけても横須賀で働こうという若い優秀な方が来ていただけないんだという悩みを持ってらっしゃる中小企業の経営者の方は、非常に多い。
- ・「中小企業や個人商店が輝けるまちであること」、「横須賀独自の地域性に密着した産業」というふうにある。私は、色々な地域で銀行の支店長をやらせていただいたが、非常に技術を持ったメーカーや、その地域に根差してしっかりと売上を築いてらっしゃる商店がまだまだ横須賀のまちの中では顕在しているので、もちろん新しい起業家の挑戦も重要であるが、せっかくな技術、いいお客様をお持ちの中小企業、個人商店、ここをしっかりと支援してあげる策を講じていかないと、いくら新しいものをどんどん呼び込んでも、伝統的に非常に良いものを持っていた横須賀の産業が衰退してしまうというのは、早く手を打たなければならないので、ぜひここは力を入れていただきたいと思う。

(小原委員)

- ・書くべき視点としてあった方がいいと思うことで、10年後になると、今以上に

副業とか、ダブルワーク、トリプルワークというものが、当たり前になってくる。公務員の方でも、昼間は公務員で、夜は違う仕事をするという人が普通になってくると思う。教育にも関わってくるが、「大人になったら何になる」というだけだったものが、「大人になったら、あれもやるし、これもやる」ということが常識になってくると思うので、そういう視点が 2030 年に向けて入っていた方がいいと思う。

(岡本委員)

- ・私も、含めた方がいいと思う視点について、「失敗を恐れない挑戦者を応援するまち」とあるが、新しいことに挑戦する時に事業がうまく立ち行かないという状況が必ず想定されるべきだと思う。そうした場合に、市として何かサポートをしていくのか、それとも、それは自己責任だと言って冷たく突き放すのかで、また挑戦したいという姿勢も変わってくるのではないかと思う。個人的な意見としては、うまくいかなかった時に、行政が何らかの形で支援していく枠組みを用意するという方が、前向きに挑戦できると思うので、そのあたりのところも文章に含めていただければと思う。

(牧瀬委員)

- ・産学官とあるが、金労言士も入れた方がいいかなと。横浜銀行さんがいらっしゃるように金融機関もそうで、あとは労働組合やマスコミ、中小企業診断士や社会保険労務士などの士業。今それが地方創生のキーワードとなっているので、地域を構成する産官学金労言士を入れた方がいいと思う。
- ・稼げる自治体ではなく、稼ぐことができる自治体なのかと、民間企業が稼げる、そういう人が集まってくるということだと思うので、稼ぐことができる自治体の方がいいような気がするので、それは事務局で考えていただければと思う。また、「であることを意識します」より、「発信していきます」の方がいいかなと、発信することによって地方から人が来るような感じがするのかなと思う。
- ・すでに議論されているが、全般的に起業が中心になっているので、既存の企業はどうするのかという議論はあると思う。起業は応援をするけれども、既存の企業は切り捨てるみたいなニュアンスが見えてしまうので、実際はそうじゃないと思うが、気にはなった。

(事務局)

- ・横須賀にある企業、技術、商店をきちんと支援していくという姿勢を入れていきたいと思う。

【意見記入シート】から

- ・既存の企業に焦点をあて、なおかつ新しい挑戦を試みたくなる記載が良いのではないかと思う。
- ・中小企業の連携のみならず、新旧の連携で新たな価値を生むという表現が良いと思う。
- ・産業構造は変化していくので、それに対応できるようスピードを持って施策を立ち上げて欲しいと思う。
- ・大手企業との連携、パイプ役を行政で進めて行ったらどうか。
- ・特に「イノベーション」の機会、ベース作りを支援すべき。
- ・起業はしても継続することが難しいので、継続するための支援策を考えることが必要。
- ・知名度と場所を生かして、日本全体から資金を集める方向性を市として示していきたい。
- ・ITに弱い世代もあり、家庭環境による差も出るはず。誰もがついていけるように市が支援していく上で進めてほしい。
- ・アート、芸能に対する産業の考え方について、議論の場が設けられると良いと思う。

(4) 環境

(小原委員)

- ・2030年には3人に1人が高齢者となり、担い手が高齢化して、環境保全と食料確保の意義があるにもかかわらず農業は危機的状況になっている。世界的にも、食糧危機がどんどん顕在化してくると思う。私自身は、10年ほど前に、大根一本1,000万円でも農家さんが売らないって言い出したら、飢え死にするなどと思って、自分で野菜を育てるようになった。やってみてわかるのは、農産物や水産物の価格は労働力と比較すると安すぎるということ。今後食糧難で価値が変わると、大根が今のような値段で買えなくなったり、国産というだけで、すごく値段が上がったりする時期が急に来ると思う。そういうことも踏まえると、産業としてチャンスがあると思うが、高齢化しているのは事実なので、そこにどう人を回すのかを考えた上で、環境保全と食糧確保に欠かせない農業の未来が見えるようなことが書いてあるといいと思う。

(若松委員)

- ・後継者がいないという農家の問題。産業というよりは、その個人の地主様の対策ということで非常に大きな問題になっている。むしろ、個人経営の農業ではなくて、せっかくのブランドがある三浦の野菜なので、農業企業みたいなものがふえてきているので、そういうのも一つのアイディアではあると思う。

(高見沢委員長)

- ・市の方は、農業政策について、どのような意味合いで書かれているか。

(事務局)

- ・産業振興の中では触れてないところなので、農業だけではなく漁業も一次産業の視点については産業の方にも加えていきつつ、環境のところでも触れていければと思う。

(高見沢委員長)

- ・一次産業という表現だが、一次産業止まりで、六次産業化されていない。消費と生産がうまく回っていないという感じがしているが、その辺は、何か政策としてはいいのか。

(事務局)

- ・六次産業化に向けた支援というのは、国の方でもやっているし、市の方でも、その取り組みに対して支援していると思う。実際に、事例もあると思うが、そういった視点は、これから先も必要だと思う。

(菊池匡文委員)

- ・産農人というプロジェクトをやっている。何かというと六次産業化で、マーケットセンスを持った農業人を育てるということ、県の都市農業課と一緒にやって、高校生を育てている。起業化していくという例がある。

- ・「自分ごとの意識が未来を守るまち」と書いてあり、間違っていないが、10年後を想定すると、もう少し思い切った表現も必要かなと、自分ごとかどうかは価値感で、価値感を変えられるかどうかというのは難しい問題で、一つの要素になると思う。だとすると、少し踏み込んだ形で生活環境の横須賀モデルを構築するとか、横須賀の環境に対する姿勢というか、そのぐらいは思い切った表現があっ
ていいのかなと思う。

(北村委員)

- ・どれも繋がっているという面では、私どもの働いている職場も、環境という面もあり、社会貢献という意味でも、清掃活動とか、そういうところにも目を向けた活動がある。身近な所、海を綺麗にとか、今日お話があったことは全部繋がっていると思った。とても大きいことだが、もっと身近に感じられるような取り組みから始める。子どもでも大人でも取っかかりがあるかと思う。全部、繋がっていると思うが、テーマとして環境と言われてしまうと大きいなと感じている。

(宮田委員)

- ・子どもの頃から、快適な生活基盤をつくれるような環境づくりに取り組めたらと思う。何よりも、多様な経験、実体験をもとにした社会参加を大切にしていきたい。小さい頃から、地域の一員として地域活動に参加できるような場。例えば、ごみ拾いでも、挨拶運動でもよろしいのではないかな。そうした取り組みは、学校教育にも関係し、家庭や地域の教育力の向上にも繋がるのではないかな。特に、放課後の児童の居場所の充実という中で、そういう地域参加活動ができればよろしいかなというふうに考えている。

(好村委員)

- ・環境の分野に関して、私が思うのは横須賀市って意外とごみの分別が難しいというのがあって、誰でも分かりやすい説明があればと思う。
- ・あと、街中にごみ箱がいっぱいあったらいいなと思って、ポイ捨てとか、なくなるんじゃないかなと思う。

(小原委員)

- ・横須賀市及び三浦半島内の食料自給率というのは、国内と比べてどれぐらいの数字なのかを知りたい。

(事務局)

- ・現時点でそのデータが把握できるかお答えができないが、調べてお答えしたい。

(牧瀬委員)

- ・農水省で食糧費自給率の推計シートがあるので、それを使うといいと思う。
- ・横須賀市は、1996年の環境基本条例の中で、初めて環境権を提起していて、環境先進市。日本には、まだ環境権はない。環境権は、いわゆる幸福追求権や生存権の中に含まれているという議論になっている。その基本に立ち戻ると、色々と

見えてくるのかなと思う。長くやってきたので、再度、発見していただいて、これを良くしていただきたいと思う。

- ・環境問題は、よく言われているが、シンクグローバリー、アクトローカリー。いわゆる地球規模で考えて、そして地域で行動することがよくやられている。ところが、この中では、地球規模が多すぎて、地域で行動するのは、食品ロスやごみを減らすとか、リサイクルを推進するくらいで、話が大きすぎているので、そこで議論が盛り上がらないのかなと、もう少し、アクトローカリーなことが入ってくると思う。

(櫻井委員)

- ・地域の子どもたちと、荻野川の周りを清掃しながら歩いて、そのあと、芋掘りをするというのを毎年やっていて、その際、子どもたちが本当にごみをよく拾う。ごみの量を競うぐらい。環境問題はサステナビリティとか色々言うが、やはり横須賀が好き。今住んでるこの地域が好きという子どもたちが環境を守っていくと思う。その先に、地球の環境を守るとかがある。まずは、この横須賀が好きという気持ちのある子どもたちに、どんどん環境のことを教えていく、ごみ拾いとかをしていくというような教育も含めていけるといいと思う。

(鳥澤委員)

- ・環境というと、色々なものを含んでいるので、10の柱の中で環境といったときに、色々なものに共通しているという議論もあり、ここで、なかなか盛り上がらないのはなぜなのかと考えていたところ、先ほどブランディングというキーワードもあったが、横須賀の環境とは何かということが、もう少し左側に具体的に書けるといいのではないかと感じている。右側の写真に出ているような猿島とか、あとは別の写真にある川辺とか、そのような何か具体的な、横須賀の方たちが、横須賀の外の人たちにも自信を持って胸を張っているような「これが横須賀の環境です」というようなものがあれば、それを前面に出すような表現があってもいいのかなと感じた。

(山本委員)

- ・横浜から横須賀に移住してきたが、一番の理由は自然環境に一目惚れして、谷戸に引っ越した。自分は、アーティストとして活動していて、アートのサポートは横浜市の方が手厚い所は正直あるが、それでも横須賀に行きたいと思ったのは、自然環境。文化、芸術で使われるカルチャーという言葉の語源も、耕すという意味と繋がっていて、何か自分が土地を耕していくところから、始めたいなという思いで横須賀に魅力を感じた。今、社会人大学の学生として、クリエイティブサステナビリティという授業に通っていて、自然環境に対しては色々と考えている。自分も形あるものを作ることをしているので、分解されないものではなく、循環していくようなものを作りたいと思っていて、それを考える場所として、

海も近くて、海と山が繋がっている横須賀で考えていきたいなと思っている。

- ・環境という言葉がすごい広がったり、どこから話していいか分からないというのもあるが、例えば、それを話す場を設けるといふか、自分は興味あるけど、分からなくて話せないようなことを地域の人と話す場を、作ったり、PRしたりということも何かできるのかなとか考えている。

(高見沢委員長)

- ・今の話を聞くような機会を設けられないのかというものも含めて、環境のところの今後の取り組み方のご説明をお願いします。

(事務局)

- ・今日も含めて、全体的に環境でそういった語らう場というのは、いろんな場面で持ってるんじゃないかと思う。それについては、もう少し全体を巻き込む形であればいいと思う。この環境については、個別の分野別計画もあるので、そうした計画も意識しながら書いていければと思う。

(高見沢委員長)

- ・部長の方からも何かご発言いただけるか。

(事務局)

- ・本日、議論いただいた4分野、すべてで、委員の皆様にお詫びしなきゃいけないのは、大変表現がわかりにくかった部分があり、議論しにくかったと思っている。何よりも、横須賀市の基本構想として、市民の方にお伝えをしていくという視点が少し欠けていたということ。それから、市としての考え方、姿勢、目指すもの、そういったものがわかりにくいというご指摘をいただいたので、横須賀市が2030年に向けて何を目指していくのかということを書いた上で、あるべき姿に移っていきたいと思っている。また繰り返しになるが、今後、右側のページに具体的な政策の方針や、基本計画、実施計画に繋がっていく施策の例示についても、きちんとまとめていきたいというふうに考えている。

【意見記入シート】から

- ・「農業」という単語は、この分野に含めない方が良いと思う。「漁業」も該当するし、他の産業も環境への課題はある。
- ・「環境」こそが、2030年に目指す指標として一番重要で、かつ、市民の方も理解しやすいと思うので「2030年」、「将来」など具体的な施策や課題を記載した方が良いと思う。
- ・環境に対して二つのプロジェクトを市とやっている。
 - ①ビッグデータを活用した授業を総合で提案し進めている。
 - ②「つづく、みんなの猿島プロジェクト」。環境と観光の両立を結び付けた“環境×観光×学び”の循環を目指すプロジェクト。こういった意識づけにより人材を育成していくことが重要ではないか。
- ・エコツーリズム、アグリツーリズム、別荘(避寒地)としても価値がある。環境大臣も「海の軽井沢」を提唱している。
- ・市民の誰もが一次産業に関わる場(市民農園など)を作れば一人ひとりが環境の大切さを理解しつつ、生活支援にもつながるのでないか。
- ・「住民の横須賀の自然環境をテーマに個人的な話を聞く会」など小規模なコミュニティでも話せると良いと思う。

3 その他

(事務局)

- ・次回会議の開催は、1月中旬から下旬を予定している。日程については、改めてご通知させていただきたい。

(鈴木委員)

- ・環境の話はあまり出なかったが、横須賀の自然環境は非常に良い。それから、福祉環境も非常に良い。その中で、子どものことが色々と問題なので、児童環境をどうしていくかが大事。

12時00分 閉会

(以上)